この人に聞く――

地域に根ざしたスポーツクラブづくり

ＮＰＯ法人やまつみスポーツクラブ 理事
塚野真樹さん

スポーツの楽しさを広く伝え、スポーツを通して子どもたちを育て、スポーツによって地域を元気にしたい――。元Ｊリーガー塚野真樹さんがふるさと米子で始めた活動が、多くの人を巻き込みながら、その輪を広げています。

―活動のきっかけは？

大学時代に初めて芝生のグランドでプレーして「これはいい」と思った。こんなグランドが自分でもできないか、それが大学生のころの夢。

ヴィッセル神戸を退団して郷里に帰ったのは、米子が好きだったから。でも自分の経験を生かしてサッカーに関わっていたいと思っていたし、遠征で海外のスポーツクラブを見たときに感じたものを「いつか自分でも」、という思いがあったのかもしれない。

みんなが「俺たちのクラブだ」と言う。いろんな人が、自分のできる範囲でクラブに関る。クラブがコミュニティの中心になっている。そんなものを。

―まず、子どものスポーツ教室を始められましたね。

「ジョイフットよなご」というスクール活動を始めたのが6年前。空き倉庫を借りてやっていた。最初はサッカーを教えていたが、小学2、3年生の子はしら～としている。「じゃあ、遊ぼう」と鬼ごっこをしたらすごく盛り上がって、「そうか、これでいいんだ」と。

今は町の中に子どもたちの集団がなくなった。昔は集団の中で自然と身に付いていた段取りの力やコミュニケーション力がなくなっている。だったらまず、子どもたちの遊び場をつくろうと思った。

スポーツも遊びの延長。この活動は「楽しもう」がスタートなので、共感する人も多かった。楽しいことが嫌いな人はいないですからね。

スポーツは、自分が生産者で消費者。自分たちで用意して自分たちで楽しむ、それが本当に楽しい。

―ＮＰＯ法人になったのは？

ジョイフットは、個人事業として会費をもらってやっていた。それを金儲けだと言う人がいる。確かに金儲けだが単なる金儲けではない。そう思いながらうまく説明できなかった。それをピタッと表したのがＮＰＯの考え方。「利益の前に理念がある」ということを。

―ＳＣ鳥取の運営母体でもありますね。

同じころ、ＳＣ鳥取が勝ち進み、ＪＦＬ（日本フットボールリーグ）に昇格することになった。その運営もＮＰＯの定款は入っているが、それが「やまつみ」の目的ではない。でも、ＳＣ鳥取がシンボルとなって、クラブがより地域とつながったという面はすごくある。みんなが楽しんで、感動して、一心同体となる。そういう一体感というか、関係性を築く力がスポーツにはある。

―クラブ運営で大切にしていることは？

自分たちも楽しみ、自分たちのやっていることが周りにも役立って喜んでもらえるというギブ・アンド・テイクの関係を築いていく中で、経営的にも自立しなければならないということ。

その点「やまつみ」は、専従の職員もいるから、時間も割くし効率も考える。みんなが参加したいと思うプログラムも考える。学校スポーツや企業スポーツだと、段取りする必要はないが、地域でスポーツを楽しむ環境をつくるには、理念と同じくらいマネジメントが必要。今、行政もクラブマネージャーの育成や研修を重視しているように。

―特に力を入れているプログラムは？

「復活！公園遊び」という事業。公民館や子供会単位に声を掛け、プログラムを持って出かけていく。昨年は６０回以上やった。

鬼ごっこや缶けり、メンコをやる。子どもたちと一緒に大人たちも集まってくる。メンコの得意なおじさんを子どもたちが尊敬する。こうやって、昔のような地域のコミュニティができてくる。公民館や子供会といった日本的な単位をもっと活かした仕組みづくりを考えた方がいいのではと思っている。

―最後に、これからのことを。

財政的にも厳しいし、人手も足りないが、現状は悪くない。仲間も広がったし、楽しさも忘れていない。これからは、活動をいかに維持し、発展させていくかということ。

「ＳＣ鳥取がＪリーグに上がりたい」というより、「ジャスコに負けたくない」という気持ちの方が強い。子どもたちに休みの日に行きたいところは？と聞くと、「ジャスコ！」と返ってくる。でもここに来て遊んだ方が楽しいだろうと。スポーツクラブは一種のコミュニティ。そこに行けば誰かがいて受け入れてくれ、楽しく遊べる。そういうものを目指したい。